

宇治の美術工芸

宇治市教育委員会



宇治の美術工芸

宇治市教育委員会

はじめに

文化財保護思想の普及を図るため宇治市指定文化財を紹介した冊子『宇治の文化財』を昭和五十六年三月に、続いて、昭和五十九年三月には、市内の主要遺跡を選び『宇治の遺跡』と題する冊子をそれぞれ刊行しました。両書とも多くの方々に大変活用していただいているところであります。

このたび、『宇治の文化財』の第三集として、市内に所在する国宝、重要文化財に指定されている三十三件の美術工芸品を紹介するうえから『宇治の美術工芸』を発刊することになりました。

文化財を保存し、且つその活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献する目的で制定されたのが、文化財保護法であります。国においては、文化財保護法にもとづき、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいがない国民の宝たるものを国宝に指定しているところであります。本市に所在する美術工芸品のなかで国宝として六件、重要文化財として二十七件が指定されていますが、これら三十三件の国指定文化財は、京都府下全体の国指定文化財の二パーセント、京都市を除くと十八パーセントを占めています。

一方、国指定文化財としての美術工芸品の種別はいうまでもなく、絵画、彫刻、工芸品、書跡、歴史資料であり、質的にも極めて価値の高いものばかりで、長い歴史と風土のなかで先人の努力によって守り育てられてきました。その点、本書に紹介しました国指定文化財は、宇治の千年の歴史を明らかにするうえからも大切なものであるといえましょう。こういった意味におきまして、本書が宇治の文化遺産に対する理解を深め、保護を図るうえに役立つことを願っている次第であります。

なお、この冊子の発刊にあたり、美術工芸品の概要及び解説は、京都府教育庁指導部文化財保護課技師根立研介氏に執筆をお願いしました。同氏のご努力に厚くお礼を申しあげます。また、京都国立博物館、奈良国立博物館、京都府教育委員会、文化財保有者、文化財管理者等関係各位にも格別のご協力賜りました。謹んで敬意を表し、お礼を申しあげます。

昭和六十年三月

宇治市教育委員会

教育長 岩本 昭造

目次

繪画

鳳凰堂中堂壁扉画

本殿扉絵

紙本著色隱元和尚像

紙本淡彩觀音図

紙本淡彩西湖図等

彫刻

木造阿弥陀如来坐像

木造雲中供養菩薩像

木造天蓋

木造十一面觀音立像

木造菟道稚郎子命坐像

木造薬師如来坐像

木造毘沙門天立像

木造阿弥陀如来及両脇侍坐像

木造毘沙門天立像

木造釈迦如来立像

木造地藏菩薩坐像

木造地藏菩薩立像

平等院…………… 8

平等院…………… 10

萬福寺…………… 12

萬福寺…………… 13

萬福寺…………… 14

平等院…………… 16

平等院…………… 18

平等院…………… 19

平等院…………… 20

宇治神社…………… 21

西導寺…………… 22

西導寺…………… 23

三室戸寺…………… 24

三室戸寺…………… 26

三室戸寺…………… 27

能化院…………… 28

放生院…………… 29

木造不動明王立像	放生院	30
木造十一面觀音立像	白山神社	31
木造伊邪那美尊坐像	白山神社	32
銅造阿闍如来立像	地藏院	33
板彫両界曼荼羅	地藏院	34
銅造阿弥陀如来及脇侍像	地藏院	36
銅造釈迦如来坐像	地藏院	37
銅造大威徳明王像	地藏院	38
木造觀世音菩薩坐像	地藏院	39
木造阿弥陀如来立像	地藏院	40
金銅鳳凰	平等院	41
梵鐘	平等院	42
梵鐘	称名寺	43
宇治橋断碑	放生院	44
書 跡	萬福寺	45
黄檗山木額・柱聯・榜牌・回下書	宝蔵院	47
歴史資料	鉄眼版一切経版木	48
	如来・菩薩・梵鐘の各部名称	48
	用語解説	51
	国指定美術工芸品一覧	54
	写真提供先一覧	56

宇治の美術工芸品（概要）

宇治川流域を中心とする宇治の地は、古来水陸交通の要衝の地であり、また平安遷都後は藤原道長の宇治別業などに代表される平安貴族の別業（別荘）の地として栄えた。

このように古い歴史を持つ宇治には多くの文化財が伝えられているが、その中で国宝及び重要文化財に指定されたものは、絵画五件（国宝一件、重要文化財四件）、彫刻二十二件（国宝三件、重要文化財十九件）、工芸品三件（国宝二件、重要文化財一件）、書跡二件（重要文化財）、歴史資料一件（重要文化財）、総計三十三件（国宝六件、重要文化財二十七件）である。京都府全体で国指定文化財に指定されているものは、昭和六十年三月一日現在で国宝百七十五件、重要文化財千四百五十件、計千六百二十五件であり、この中で宇治市が占める比率は総数で二％（国宝で三％）であるが、京都市を除けばその比率は著しく増し、総数で一八％（国宝で五〇％）となり、京都市を除いた府内の市町村の中では最も多くの国指定文化財が所

在している。

これらの美術工芸品の中で特に注目すべきものは、鳳凰堂中堂壁扉画、阿弥陀如来坐像、雲中供養菩薩像・木造天蓋・梵鐘・鳳凰からなる天喜元年（一〇五三）の平等院創建当初に遡ると思われる遺品の数々である。これらは、いずれも国宝に指定されているが、建造物の国宝指定を受けている鳳凰堂や史跡・名勝の庭園と共に、藤原貴族の追い求めた極楽浄土の様を端的にあらわしたものと見え、個々の作品の卓越性に加え、これらのものが一体となってほぼ当初の姿で残っている点は他に例がなく、わが国の文化史上極めて重要なものである。この他に注目すべきものは、萬福寺に伝わる黄檗宗関係の遺品である。萬福寺は寛文元年（一六六一）隠元隆琦いんげんりゅうきが創建した寺であるが、彼の来日と黄檗宗の伝来は日本の仏教界に大きな衝撃を与える一方、建築・美術・書道などの文化面に対しても多大な影響を与えた。萬福寺には、このような黄檗文化を代表する美術工芸品がいくつか重要

文化財に指定されている。隠元和尚像は、中国と西洋との画法を折衷し陰影法を用いて描かれた独特の画像である黄檗画像の代表作であり、また黄檗山木額・柱聯・榜牌・同下書は、開山隠元以下の墨蹟で、黄檗流の書の代表的遺品である。

以上のように宇治の中でも特に注目すべきものについて若干触れたが、その他の文化財についても分野別に概観しておこう。

まず絵画の分野であるが、国宝一件を含め五件が国の指定文化財となっている。時代別では、平安時代二件、江戸時代二件、中国(明)一件である。平安の二件はいずれも板絵で、前記の平等院・鳳凰堂中堂壁扉画(国宝)と宇治上神社の本殿扉絵がこれである。宇治上神社の扉絵は、平安後期に描かれたものと思われるが、神道関係壁画としては現存最古の遺例として極めて重要なものである。また大和絵肖像画を考える場合にも貴重な資料である。江戸時代の二件及び明時代の一件は、いずれも萬福寺所有のもので、このうちもと東方丈にあった障壁画は池大雅の円熟期の作品として江戸時代障壁画中注目されるものである。また明時代の観音図は、隠元の題字及び賛*

があり、その画法も黄檗肖像画に通じるものがあり、広い意味で黄檗美術の作品といえよう。このように絵画はあまり指定件数も多くなく、また時代や所有者が限られているが、いずれも絵画史上重要な遺品といえよう。

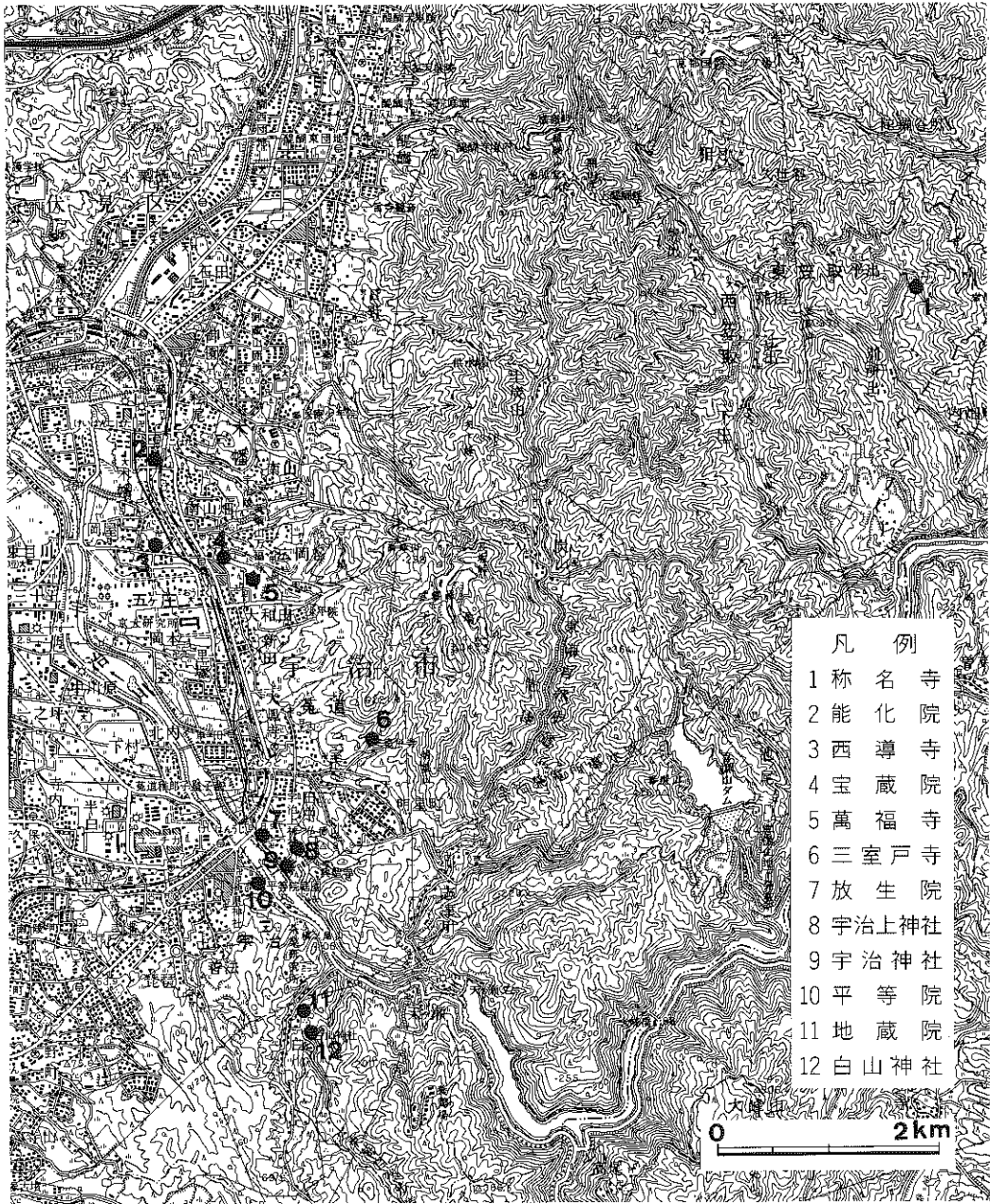
彫刻は二十二件(うち国宝三件)と数が多く、宇治の国指定文化財の三分の二を占めている。その時代別内訳は、奈良時代、平安初期のものが三件、平安後期(ここでは、平安末から鎌倉初期にかけてのいわゆる藤末鎌初の彫刻が多く含まれているが、便宜上平安時代に含めておく)十八件、鎌倉時代一件となる。平等院のものを除けば、この内で注目すべきものは地蔵院の彫刻群がある。特に阿闍如来像・阿弥陀如来及脇侍像・釈迦如来像の三件の小金銅仏は奈良時代もしくは平安初期に制作されたもので、この時代の小金銅仏がまとまって伝来していることは府内でも当寺だけである。また当寺には藤原頼通の女の寛子が康和四年(一一〇二)に創建した金色院の遺品と思われるものがいくつか伝わり、中でも大威徳明王像は数少ない平安後期小金銅仏の優品であり、板彫両界曼荼羅^{*}は他にはほとんど類例を見ないものである。その他、宇治神社の菟道稚郎子命像及び白山神社の伊邪那美尊像は、神像

彫刻の古例として注目され、三室戸寺の釈迦如来像は承徳二年（一〇九八）頃に制作されたものでいわゆる清涼寺式釈迦像の中でも早い頃に模刻されたものであり、放生院の地藏菩薩像は鎌倉時代中頃に叡尊によって造立されたと伝えられるものである。なお、平等院を含め前記したもの以外は、ほとんど平安時代末頃に制作されたもので、当時の盛んな造仏の様が知られる。このように彫刻は甚だ遺品の数が多く、またその中にはわが国を代表する作品や、遺例の稀な作品があり、宇治の地は彫刻史上においても注目すべき地域といえよう。

工芸品は三件（うち国宝二件）と数が少なく、また金工品に限られている。このうち国宝は平等院関係の二件で、残りの一件は称名寺の梵鐘である。この鐘は、承元四年（一一二〇）の銘があり、鎌倉前期の基準作といえる。

書跡の指定は二件で、前記の萬福寺の扁額類と放生院の宇治橋断碑で、通常の紙に書かれたものと異なっている。特に宇治橋断碑は、大化二年（六四六）に制作されたものと伝えられ、府内に所在する金石文の中では最も著名なものの一つである。また歴史資料として府内で唯一重要文化財となっている鉄眼一切経版本は、四万枚を

越える膨大なもので、近世印刷史上重要な資料である。以上のように宇治に所在する美術工芸品を概観してきたが、これら文化財の中にはわが国を代表するものや他では容易に見ることができないものが多く含まれていて、宇治の地は我が国の中でも貴重な文化財の宝庫といえよう。



寺 社 の 位 置 図

鳳凰堂中堂壁扉画（板絵着色） 一四面

九品来迎図

旧扉画八
（上品中生、上品下生、
中品上生、下品上生、
中品中生、下品中生、
中品下生、下品下生）

日想観図 扉画二

本尊後壁画 一

附 九品来迎図 扉画（上品上生）二面

所有者 宇治蓮華

平等院

法量 上品中生図 縦三七四・五センチ

横一〇六・〇センチ（向かって右）

九〇・〇センチ（向かって左）

日想観図 縦二四六・五センチ

横一〇八・〇センチ（向かって右）

一〇五・〇センチ（向かって左）

本尊後壁 縦三三七・〇センチ

横三二六・〇センチ

時代 平安時代（天喜元年・一〇五三）

指定 絵画・国宝 昭和四十七年五月三十日

天喜元年に完成した鳳凰堂中堂内の四方の扉と南北妻壁及び本尊後壁には、『観無量寿経』に基づくと思われる九品来迎図や日想観などが描かれ、当時の貴族が理想とした来迎の姿があらわされている。

画題別に見て行けば、来迎の様を九種に分けた九品来迎図のうち、正面（東）扉画は上品上生図で、このみ寛文十一年（一六七二）に新写されたものである。他の来迎図は四方の扉や壁、本尊後壁背面に描かれているが、中品下生図のみが現在では認められない。また、中堂後方（西）の扉には日想観が、また本尊後壁前面には阿弥陀浄土図と思われるものが描かれている。図はいずれも、美しい大和絵山水の中に描かれているが、当時の大和絵の資料としても貴重なものである。

これらの壁扉画は、剝落が目立ち、後世の落書によって汚され、また一部は後の時代のもので取りかえられているが、そのほとんどが当初の姿を良くとどめていて、平安時代に数多く制作された阿弥陀堂内部の装飾画の優品として大いに注目されるものである。

なお、下品上生図には川辺に網代あじろが描かれていて、あたかも当時の宇治川の姿を写したような所がある。



下品上生図（南側扉）

二 本殿扉絵 (板絵著色)

四面

童子像(第一殿) 二

隨身像(第三殿) 二

所有者 宇治山田 宇治上神社

法量 童子 各 縦九五・八センチ

横五七・〇センチ

隨身 各 縦九五・八センチ

横六六・八センチ

時代 平安時代

指定 絵画 昭和五十二年六月十一日

宇治上神社は、宇治橋東方の小高い丘の麓にあり、祭神は応神・仁徳両天皇及び菟道稚郎子うじのみこいらつこと伝える。その草創については良くわからないが、式内社の一つと思われる、明治維新以前は、隣接する宇治神社と二社一体の存在であった。

最古の神社建築として名高い当社の本殿(国宝)は内殿三棟からなるが、この内殿の第一殿(向かって右、祭

神仁徳天皇)と第三殿(向かって左、祭神菟道稚郎子)の扉の内側に童子像と隨身像が描かれている。

図様は顔料の剝落が甚しいためはっきりしないが、童子は髪を左右にわけて耳のあたりでくる美豆良みずらを結ゆい、朝服の上衣である袍ほろをつけ、八曲屏風を背に台上に坐している。隨身像は、袍をまとい笏しやくを持して坐している。

その制作は、本殿と同時期の平安後期と思われるが、神道関係の壁画としては現存最古の遺例として極めて重要なものであるとともに、平安時代の大和絵肖像画を考*える上でも貴重な資料である。



隨身像（第三殿）



童子像（第一殿）

三 紙本著色 隱元和尚像

一幅

元規筆 八十翁隱元自題トアリ

所有者 五ヶ庄三番割 萬福寺

法量 縦一三八・〇センチ

横 六〇・五センチ

時代 江戸時代(寛文十一年・一六七二)

指定 絵画 明治四十年五月二十七日



萬福寺は、徳川幕府の援助を受け寛文元年(一六六一)に渡来僧隱元隆琦が創建した黄檗宗の大本山である。隱元(一五九二〜一六七三)は中国福建省の人で、承応三年

(一六五四)に長崎で商業を営む華商や僧の強い招請により多くの門弟らを従えて来日した。しばらく長崎の興福・崇福の両寺や摂津の普門寺で布教を行なったが、ついに五ヶ庄の地に黄檗禅の本山たる萬福寺を創建した。

隱元の肖像画はいくつか残されているが、この重要文化財の指定を受けているものは、隱元の退院所となった松隠堂に伝えられたもので、隱元の肖像画の中で最も著名なものである。図上にある隱元の自賛により隱元八十歳の時の画像と知られ、その筆者は画面向かって左隅の印章から元規とわかる。元規は長崎の人と伝えられるが、その画系はわからない。彼は西洋画にみられる陰影法を用いて像主を写実的にあらわす独特の画像である「黄檗画像」の大成者とみなされるが、本画像はこの黄檗画像の代表作といえるものである。

賛*

(臨濟正宗印)

单提柳栗上扶桑、若得
満頭尽雪霜、両眼円明
浄法界、半身独露愈風
光、闡物先聖拈花旨、点

醒後毘大夢場、永掛松堂

伴梅竹、從教地久与天長

辛亥孟春望日

八十翁隱元老僧自題

(隆琦印)(隱元印)

四

純本淡彩観音図

陳賢筆
崇禎九年の款記がある
(十八図)

一帖

隱元の題字及び賛がある

所有者 五ヶ庄三番割

萬福寺

法量 十八図 各 縦三五・〇センチ

横五三・七センチ

時代 明時代(崇禎九年・一六三六)

指定 絵画 昭和五十二年六月十一日

様々な姿をしている白衣をまとう観音(白衣観音)を光沢のある絹に描いたもので、十八図を一冊にまとめられている。図はすべて墨筆描して淡彩を施すが、部分的に濃

彩を施している

筆者は陳賢という明の画家であるが、彼は黄檗宗とは深い関係があったと思われる、彼の作品には隱元や木庵もくあんなどの黄檗僧が著賛しているものが多い。本図の題字や各図につけられた賛さんもやはり隱元のあらわしたものである。また、本図の立体感のある面貌の描写は、黄檗画像に通じるものがあり、大変興味深いものがある。

本図は、観音を題材としているが、仏画というよりも



徳の高い女性を描いた少女図のような趣きがあり、隱元の賛とあいまって、数多い陳賢の作品の中でも最も注目すべきものである。

五 西湖図

紙本淡彩	
西湖図	四幅
西湖図	四幅
虎溪三笑図	八幅
五百羅漢図	八幅
瀑布図	四幅
波濤図	一幅
	六點
	大雅筆

所有者 五ヶ庄三番割

萬福寺

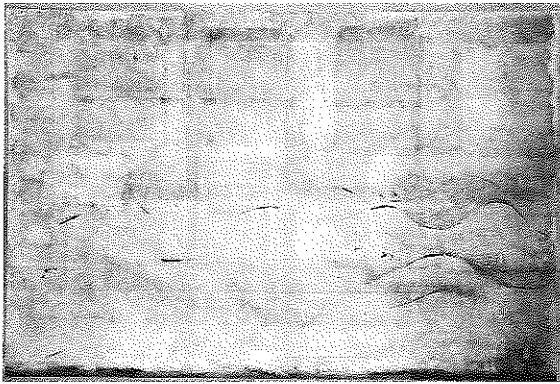
法量 五百羅漢図 各 縦一八〇・〇センチ

横一二五・〇センチ

時代 江戸時代

指定 絵画 昭和三年四月四日

もと東方丈の襖や壁に描かれていた障壁画であるが、現在は二九幅の掛幅に改められている。東方丈は六室に分かれ、南面三室は、西より行者寮に瀑布図を、寿位間に五百羅漢図を、小拜間に虎溪三笑図を描いていた。^{*}北面は西端の衣鉢寮に波濤図を、東端の上之間に西湖図を描いていた。



波濤図

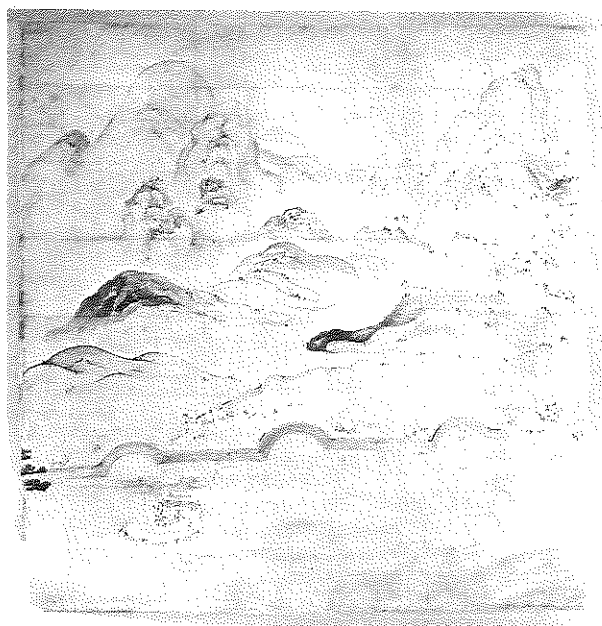
筆者は、日本の文人画の祖とも呼ばれる池大雅（二七二三〜七六）である。大雅は当山一五世大鵬和尚と親交があったらしく、本障画の制作は、大鵬が第一八代の再任を退いた明和二年（二七六五）ごろに和尚の依頼により描かれたと思われる。

西湖図や虎溪三笑図は水墨による雄大な景色が描かれているが、五百羅漢図はそれらとやや趣きを異にし、羅漢たちの群像を指先で描く指頭画の手法を一部にまじえて描いている。この図は、当山に伝えられている王振鵬

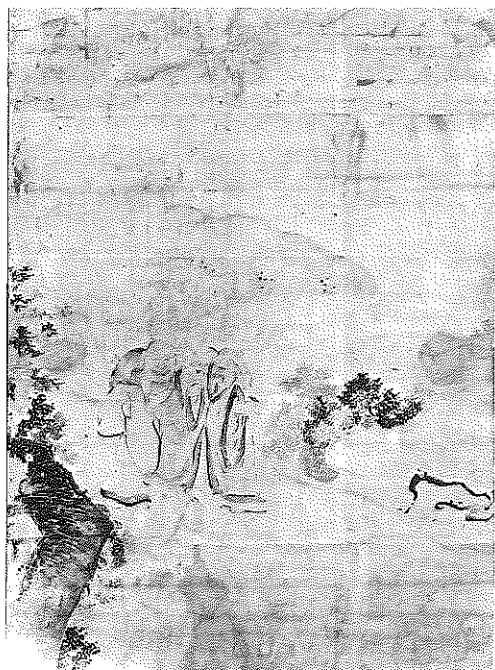
筆の五百羅漢図

（元時代）をもと

にしたものであるが、大雅はつどい群をなす羅漢たちを自由闊達によりダイナミックな構成で描き出している、大雅の障壁画の代表作の一つとして注目される。



西湖图



虎溪三笑图



五百罗汉图

六 木造阿弥陀如来坐像 (定朝作 鳳凰堂安置) 一 軀

附 木造阿弥陀種子曼荼羅 一面
木造蓮台 一基 一具

所有者 宇治蓮華 平等院

法量 像高 二八三・九センチ

附 種子曼荼羅 徑 三〇・八センチ

蓮台 全高 一六・七センチ

時代 平安時代(天喜元年・一〇五三)

指定 彫刻 明治三十二年八月一日

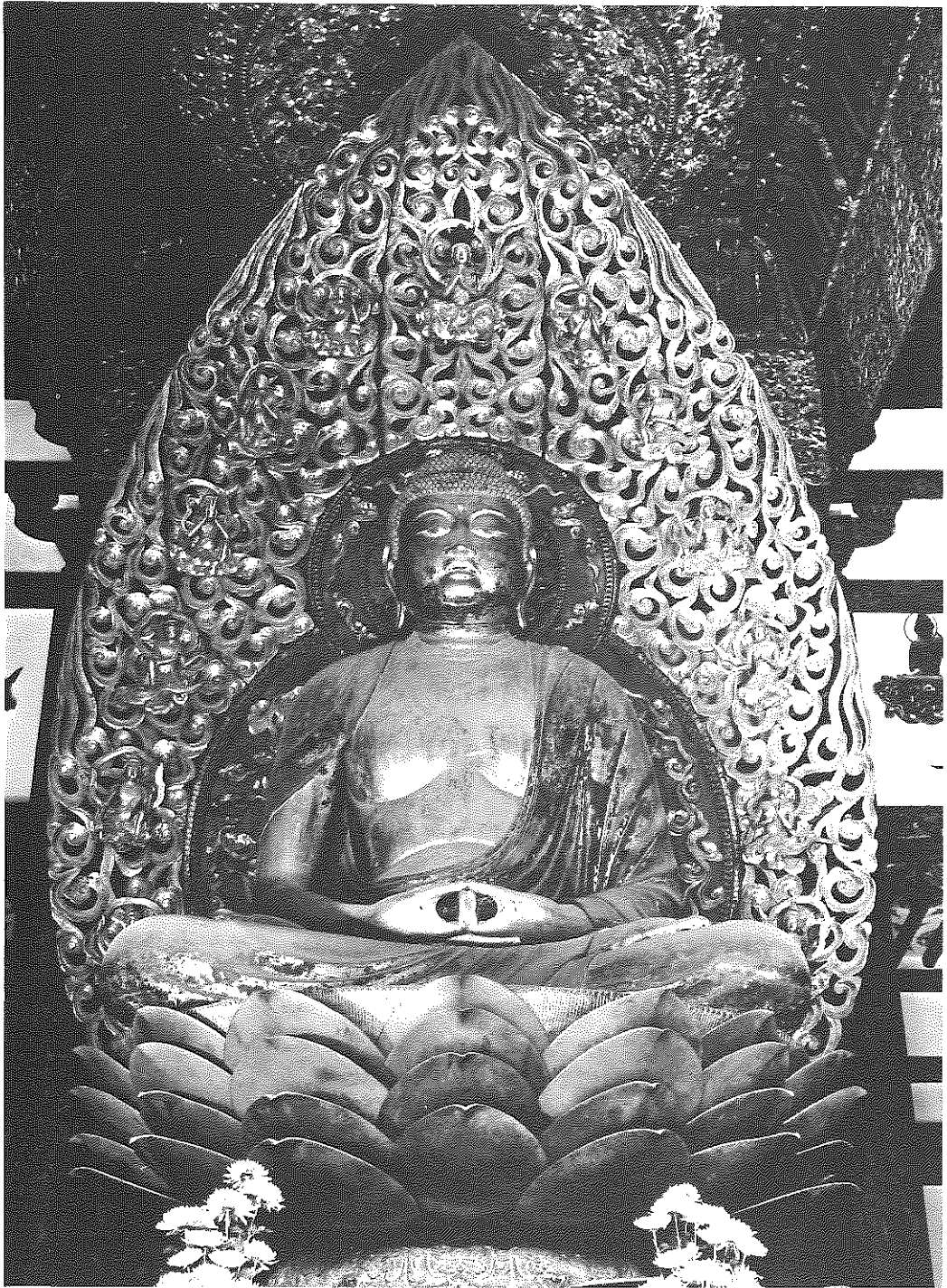
国宝 昭和二十六年六月九日

平等院は、永承七年(一〇五二)に関白左大臣藤原頼通が、道長の宇治別業を寺に改め、大日如来像を安置し、これを平等院と号したことに始まる。翌天喜元年に頼通は阿弥陀堂を供養したが、これが鳳凰堂である。平等院にはその後、法華堂、多宝塔など次々に堂宇が建てられていったが、戦乱などで滅び、現在は鳳凰堂のみが当初の姿を伝えている。

この鳳凰堂の中堂の須弥壇上に、蓮華八重座上に坐り、大きな光背を負い、頭上に天蓋をいただいて安置されているのが、本尊の阿弥陀如来像である。定印を結ぶ像は、檜材を用いた寄木造りの像で、表面は金箔を押し、漆箔仕上げとしている。頭体幹部の木寄せは、前面・背面を別材として、ともに正中線で二材矧ぎとするが、背面の首廻りのみ割り矧いでいる。これに両足部などの各部材を矧ぎ付けるが、いずれの材も入念に内矧ぎをおこなっており、寄木造りの完成した姿を示している。顔の表情は穏やかで、全体の調和の整った像であるが、藤原貴族の理想とした仏の姿がそこに示されている。

本像は、天喜元年に仏師としては最も著名な定朝によって制作されたことが当時の貴族の日記からわかるが、和様彫刻の頂点を示す像として以後の仏像彫刻に大きな影響を与えた像で、台座・光背はもちろんとして堂内の様々な荘厳とともにほぼ当初の姿を伝えている点も甚だ貴重である。

なお、附指定のものは、像内に納められているもので、やはり本像制作時に納入されたと思われる。



七 木造雲中供養菩薩像（所在鳳凰堂）五一軀

所有者 宇治蓮華 平等院

法量 総高 四〇・〇（八七・〇センチ

時代 平安時代（天喜元年・一〇五三）

指定 彫刻 明治三十七年二月十八日

国宝 昭和三十年六月二十二日



北25号

鳳凰堂中堂の内陣の四方の長押上の小壁に懸けられて

いる像で、雲にのって、あるいは礼拝し、あるいは楽を奏で、あるいは舞をまわって本尊阿彌陀如来像を供養している。檜材製で、表面を彩色や漆箔で仕上げている。その構造は、寄木造りを中心とするが、一木造りのものも混在している。どの像も壁に懸けられるため、頭部は丸彫りとするが体部や雲は浮彫りとなっている。

これらの菩薩像は、一部に制作年代のやや下がるものもあるが、他はいずれも本尊阿彌陀像と共通する所が多く、やはり天喜元年の鳳凰堂完成時に定朝を中心として彼の工房の多くの仏師の手によって制作されたものと思われ、当時の堂内荘嚴のありさまを現在に伝える数少ない貴重



南20号

な遺品
である。

八 木造天蓋てんがい（所在鳳凰堂）

（髹漆螺鈿方蓋及宝相華透彫円蓋）

一具

所有者 宇治蓮華 平等院

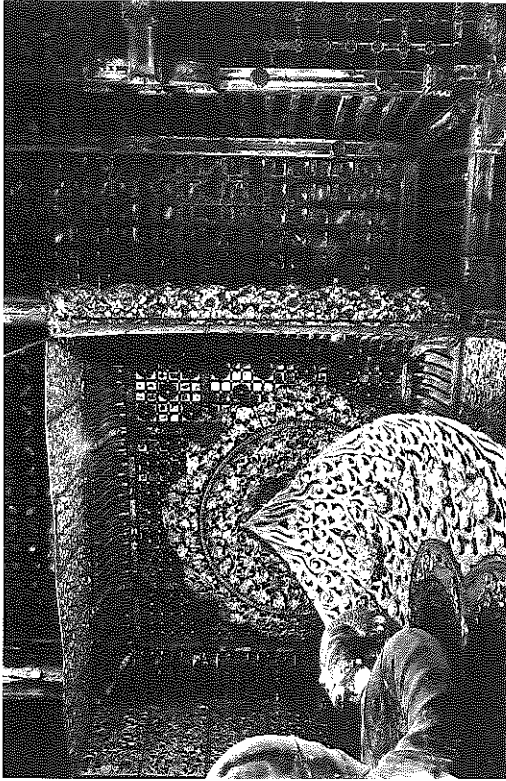
法量 方蓋 張五〇三・〇センチ

円蓋 径三〇〇・〇センチ

時代 平安時代（天喜元年・一〇五三）

指定彫刻 明治三十七年二月十八日

国宝 昭和三十一年六月二十八日



天蓋は、仏像の頭上を覆う小天井形の仏具で、仏像の莊嚴具しょうごんぐの一つである。平等院のものはまことに莊麗なもので、須弥壇とほぼ同じ大きさの長方形の箱形天蓋の内側に八葉形吹返ふきかえし付きの円蓋を取りつけたものである。方蓋は檜材製で折上小組格天井おりあひとぐみこうてんじょうを基部とし、四辺に宝相華文ほうそうげもんの透彫てうびょうりの吹上板と垂板をとりつけている。その表面は、漆箔・彩色・螺鈿らでんなどで華麗に裝飾されている。円蓋は木造（檜材）漆箔仕上げとし、一面に宝相華文の透彫を施すが、中央の八花鏡や吹返しから垂れる小天蓋は銅製である。

このように方蓋と円蓋を大規模に組合せたものは、わが国では他に例がなく、莊嚴具の最高傑作の一つといえよう。その制作は、本尊阿弥陀像などと同様に天喜元年の鳳凰堂完成時のものと思われ、本尊阿弥陀如来像の台座の宝相華文の彫口などの比較から、やはり定朝工房の手になるものと考えられる。

九 木造十一面観音立像

一 軀

所有者 宇治蓮華

平等院

法量 像高 一六七・六センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治三十三年四月七日



鳳凰堂の北方にある観音堂の本尊で、堂内の檀上中央に安置されているものである。十一面観音は、頭上に十

一の仏面をいただく観音で衆生の十一の苦を断ち、十一の仏果を開くという観音の功德を形にあらわしたものであり、我国ではきわめて古くから信仰され、変化観音の中では最も遺品の多いものである。

像は、頭体の幹部を一材より彫出するいわゆる一木造りの像であるが、背面から内割り※を施している。表面は彩色仕上げとするがこれは後のもので、右手首より先、左腕首より先、天衣垂下部てんねなども後補のものである。

肩を強く張る点や厚手の衣文表現などに一木造りの彫像の特徴が見られるが、童顔に近いおだやかな顔の表情や量感がかなり減じられている点などに平安後期の彫刻から定朝が確立した平安後期の彫刻へと移りかわっていくこの彫刻の特色が良くあらわされている。こうした作風から、その制作は平等院の創建時よりもやや古く、十世紀末から十一世紀初めころと思われる、現在当寺が所有する美術工芸品の中では最も古いものである。

二 木造菟道稚郎子命坐像

一 軀

所有者 宇治山田

宇治神社

法 量 像高 八五・〇センチ

時 代 平安時代

指 定 彫刻 明治三十六年四月十五日

宇治神社は、明治維新まで二社一体の存在であった宇治上神社の南方にあり、祭神もやはり応神・仁徳両天皇と菟道稚郎子を祀っている。本殿（重要文化財）は、三間社流造で鎌倉時代に建立されたものというが、中に菟道稚郎子命と伝える神像を祀っている。菟道稚郎子は、応神天皇の皇子で、宇治上神社の境内は、命の住した離宮の旧跡という。

像は詳しい調査がなされておらず不明な点が多いが、冠を載き、袍ほろを着け、笏しやくを持って坐っている。神像彫刻に多い等身大の大きさを持つ像で、膝部を除けばほぼ一材から彫出し、表面は彩色仕上げとしている。なお、像の各所に節が認められることから、何らかの由緒のある

霊木を用いた可能性がある。一木造りの堂々とした神像で、面相にはおおらかさがある。平安後期に制作されたと思われる、神像彫刻としては古い時代に属するものである。

二 木造薬師如来坐像 一 軀

所有者 五ヶ庄大林 西導寺

法量 像高 八三・三センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年九月二十二日



西導寺は浄土宗の寺で、永享八年（一四三六）に古西越後守頼誦の菩提を弔うため、夫人が創建した二階堂にはじまるという。慶長十年（一六〇五）には円蒼上人がこれを寺として再興し、享保十五年（一七三〇）には近くの土地から現在地に移った。

西導寺には、こうした当寺の創建をはるかにさかのぼる平安後期の仏像が幾つか伝えられている。この薬師如来像もその一つで、穏やかな顔の表情、均衡のとれた体、浅くよどみなく衣文表現などに平安後期の典型的な作風があらわれて、いわゆる定朝様※の美作である。

像は、この時代の通例どおりの檜材※の寄木造りとし、表面は漆上げとする。その姿は、右手を胸前に置き、左手は膝の上あたりで薬壺やぐちをとるといふ通常の薬師如来の形を示すものである。

三 木造毘沙門天立像

一 軀

所有者 五ヶ庄大林

西導寺

法量 像高 一六〇・六センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十三年四月二十日



この毘沙門天像は、右手を腰にあて、左手に鉾ほこ(戟げき)を持つもので、その形姿は邪鬼ではなく岩座に立つほか

は、ほとんど三室戸寺の毘沙門天像と同じである。

ただ、三室戸寺のものに比べると、本来怒りを表にあらず神将像であるにもかかわらず、顔の表情は穏やかで、全体の動きも少なく、体つきも細っそりしていて、全体に洗練されたものになっている。

像は、檜材ひのきの寄木造りよきぞうりとし、表面には彩色が施されているが現在にはほとんど剝落している。優美で繊細な平安後期の作風がよくあらわされている神将像の美作として注目される像である。

三 木造阿弥陀如来及 脇侍坐像 三軀

およびりようきようじ

三軀

所有者 菟道滋賀谷 三室戸寺

法量 像高 阿弥陀如来 八七・七センチ

観音菩薩 一〇一・〇センチ

勢至菩薩 一〇一・二センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



観音菩薩

みようじやうさんみむろとじ
明星山三室戸寺は、もと天台宗寺門派の寺であった

が、現在本山修験宗に属し修験道の寺として名高い。寺伝によれば、その創建は、光仁天皇の宝龜年間（七七〇〜八二）にさかのぼるといふが、康和年間（二〇九九〜一〇四）のころに三井寺（園城寺）第三一世隆明が中興し、現在は西国三十三所の十番札所として栄えている。

本寺の国指定文化財は、現在すべて収蔵庫に保管されているが、この阿弥陀三尊像はもと阿弥陀堂にあったものである。像は、三尊とも檜材を用いた寄木造り、漆箔仕上げとし、定印を結ぶ中尊（阿弥陀）を中央にして、その左右に合掌する勢至菩薩と左手に蓮華を持つ観音菩薩の二脇侍を配している。二脇侍は跪坐（正座）の形であらわされているが、阿弥陀三尊の脇侍にまま見られるものである。ただ、この三尊は元来一具のものでないらしく、中尊は平安後期の定朝様の様式を顕著に示しているが、脇侍の張りのある肉付けや厚みのある体部にはすでに次代の作風が認められる。しかしながら、この二者とも洗練された像であり、それぞれ当時の中央の仏師の手になるものであろう。



勢至菩薩



阿弥陀如来

一四 木造毘沙門天立像

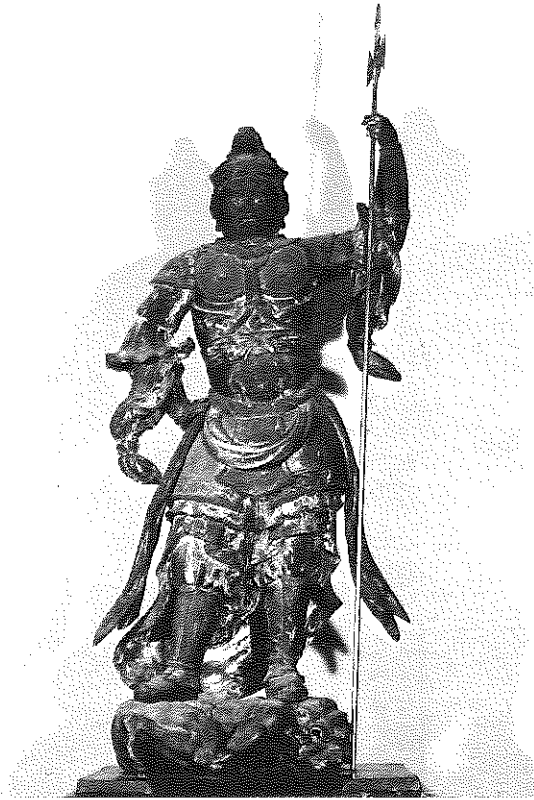
一軀

所有者 菟道滋賀谷 三室戸寺

法量 像高 一〇五・〇センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



毘沙門天は仏教の護法神の一つで、通則として四天王の北方神としてあらわされる場合は多門天と呼ばれるが、独尊として祀られることも多く、この場合毘沙門の名で呼ばれ、一般に片手に宝塔を持つものが多い。

三室戸寺のものは、通例のものと異なり、左手に戟（鉞）を持ち、右手を腰にあてて邪鬼に立つものである。寄木造り、彩色仕上げの像で、一部に切金文様を施した跡がのこっている。体全体の動きはさほど大きくなく平安後期の作風を受けついで像であるが、忿怒の顔の表情に厳しさが加わり、袖端のひるがえりなどにはかなり動きがあらわされていて、鎌倉時代の彫刻に見られる特色も認められる。平安時代末ごろから鎌倉時代の初めにかけてつくられた像と思われ、平安から鎌倉へ移りかわる過渡期の彫刻の作風がよくあらわれている。なお毘沙門天が踏む邪鬼は、後の時代のものにかわってしまう像が多いが、本像は当初のものと思われる。

一五 木造釈迦如来立像

一 軀

刻させたもので、わが国では「三国伝来」の像として信仰を集め、平安時代末ごろから盛に模刻されている。

所有者 菟道滋賀谷 三室戸寺

法量 像高一五四・〇センチ

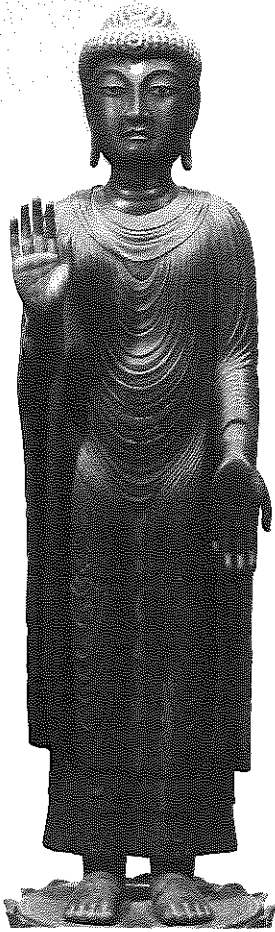
時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日

本像は、いわゆる清涼寺式釈迦如来像である。清涼寺の本尊釈迦如来像は、奄然が雍熙二年（九八五）に中国の宋の地でインドの優填王がつくらせたという像を模

刻させたものは、本寺の中興開山隆明が承徳二年（〇九八）ころに清涼寺の源像を模刻させたものと伝えられ、網目状の髪、独特の波状衣文のある通肩の大衣など清涼寺像の特異な姿をかなり忠実に写している。檜材を用いた寄木造りの像で、表面に薄く彩色を施し、著衣の所々に切金文様を加えるほか、衣文線にも切金が用いられる。また、眼には黒石を入れ、白毫には化仏を毛彫りした銀板を水晶の下にうめ込んでいて、ここにも清涼寺の源像を忠実に写しとろうとする意図が見られる。清涼

寺式釈迦像の遺品はかなりの多いが、本像はそれらの中でも最も古いものに属するものとして名高いものである。



二六 木造地藏菩薩坐像

一 軀

所有者 木幡中村

能化院

法量 像高 一三三・五センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十三年四月二十日



能化院は、不焼山と号する曹洞宗の寺である。その由緒ははっきりしないが、一説には平安時代の中ごろに浄

土教の教えを広めた恵心僧都源信が創建し、多聞山本願寺と号した伝えられる。なお、現在の寺は、寛文四年（一六六四）に曹洞宗宗仙寺（京都市下京区に所在）四世、長訓によって再興されたものである。

この地藏菩薩は、当時の本尊で、寺が火災にあった際に焼けずに残ったため、「不焼地藏」の名で呼ばれ、火災除けの信仰を集めている。

いわゆる半丈六※じょうろくの大きな像で、右手に錫杖しやくじょう、左手に宝珠を持つ通例の地藏の姿を示すものである。また、像のつくり方は、檜材を用いた一木割刳造りいちぼくわりくわぞう（頭体の幹部を一材から彫出し、体側や正中線などで割って、中を刳ったもの。従来寄木造りと呼んでいたものの中には、こういう一木割刳造りのものが多く含まれる）で、表面は彩色仕上げとしている。ただし、昭和三十七年の修理の際、表面をおおっていた後世の部厚い彩色を除去したところ、その下から当初と思われる漆箔※の跡も出てきた。

その作風は平安後期の定朝様※を基にしているが、肉付けが写実的になり、衣文は太く数も多く彫られるなど次代の要素もみられ、制作年代は平安時代末ごろから鎌倉時代の初めころまで下降するであろう。

一七 木造地藏菩薩立像

一 軀

所有者 宇治東内 放生院

法量 像高一九三・〇センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十四年八月九日

放生院は、通称橋寺と呼ばれる真言律宗の寺で、寺伝では推古十二年（六〇四）聖徳太子の命により秦河勝が宇治橋を架設した時に始まるという。しかし、宇治橋は一般に大化二年（六四六）元興寺の道登による架橋に始

まるとされるので、この寺伝はにわかには信じ難いが、かなり古くから宇治橋を管理するために寺が造立されていたと思われる。現在の寺は鎌倉時代に奈良西大寺の僧叡尊によって再興されたもので、弘安四年（一一八一）には橋寺堂供養がおこなわれている。

この再興寺に制作されたと思われるのが、現在本堂に安置されている本尊地藏菩薩像である。像は、寄木造り、玉眼※嵌入とし、表面は肉身部を粉留※、衣部を胡粉の盛り上げ彩色としている。面長でひきしまった面相や衣の太い衣文の表現などに鎌倉時代の特徴が良くあらわれている像であるが、鎌倉時代の著名な高僧叡尊がその造立にかかわったと思われることも甚だ貴重である。



一六 木造不動明王立像

一軀

不動明王は、教化しがたい衆生を忿怒の相で教に導く大日如来の化身で、平安時代以降盛んに造像された仏像の一つである。

所有者 宇治東内 放生院
法量 像高 一六〇・〇センチ
時代 平安時代
指定 彫刻 明治四十四年八月九日

像は坐像と立像のものがあるが、放生院のものはほぼ等身大の立像で、左肩に弁髪を垂れ、天地眼（右目を開いて左目を細める）で口から牙を上下に出し、右手に剣、左手に繩（索）を持つ通形のものである。檜木材を用いた寄木造りの像であるが、頭体幹部は正中線及び両体側で突き合せている。表面は、彩色仕上げとするが、現在



ほとんど剝落している。像全体の均衡がとれ、顔も忿怒相を示しながらも穏やかで、著衣の衣文は浅く流れるようになっていて、平安時代末頃の作風が良くあらわれている。現在は、本堂の脇壇上に安置されているが、当寺の鎌倉再興時に先だつ遺品である。

一九 木造十一面観音立像

一 軀

所有者 白川娑婆山

白山神社

法量 像高 五九・一センチ

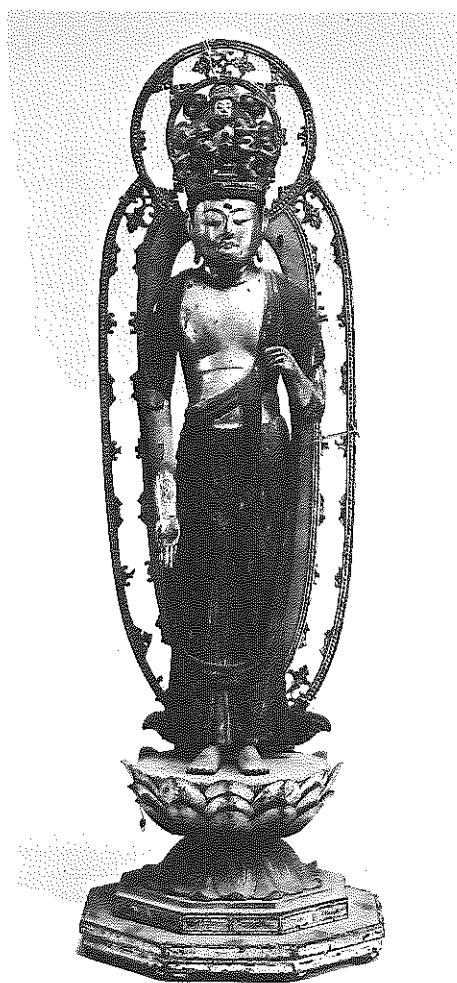
時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日

もと伊邪那美尊坐像とともに当社に安置されていたものであるが、現在は京都国立博物館に預けられているものである。明治時代以前は神社に仏像が祀られることは

一般的なことで、こうした仏像を本地仏と呼んでいるが、これは日本の神々は本来仏教の諸尊が姿を変えたものであるという神仏習合の思想のに基づいてつくられたものである。

当社の十一面観音像は、檜材を用いた寄木造りの像で、肉身部を漆箔仕上げとし、裳などの衣の部分を彩色仕上げとしている。台座・光背も当初のものが残っているが、光背の宝相華文の透彫りがかなり失なわれているのは惜まれる。優美で繊細な作風を示し、平安後期の菩薩像の一典型といえる。おそらく、久安二年（一一四六）の当社創建時の遺品であろう。



三〇 木造伊邪那美尊坐像

一 軀

の当社創建のころと思われ、神像彫刻としては古い時代のものである。

所有者 白川娑婆山 白山神社

法 量 像高 約二五センチ

時 代 平安時代

指 定 彫刻 明治四十二年四月五日

白山神社は、金色院の鎮守社として久安二年（一一四六）に創建されたと伝えられ、伊邪那美命（伊弉冉尊）を祭神としている。伊邪那美命はその配偶男神である伊弉諾尊とともに初めて日本の国土や天照大御神・素戔嗚尊などの神々を生んだという記紀神話にあらわれる女神である。

像は女神像によく見られるように髻を結び、髪を両肩前と背後に垂らしている。両手を除けば、すべて一木から彫成され、表面は彩色で仕上げられている。顔の表情はおおらかで、衣はほとんど衣文が省略されるなど、全体に伸びやかに表現されていて、平安後期の神像の作風がよくあらわれている。おそらくその制作は、久安二年

二 銅造阿閼如来立像

一 軀

所有者 白川川上り谷

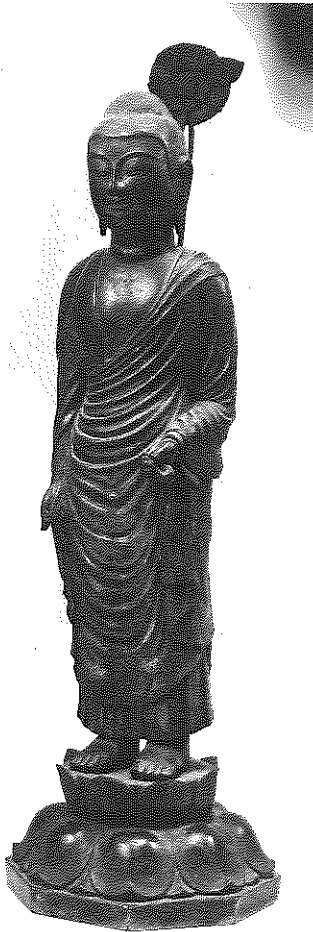
地蔵院

法量 像高 三七・七センチ

時代 奈良く平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日

地蔵院には、府内の寺院には珍しく、小金銅仏の遺品がまとまって伝えられていて、四件が重要文化財に指定されている。このうち、阿閼像・阿弥陀如来及両脇侍像・釈迦像の三件は、その伝来・尊名・制作年代などに問題が多く残されていて、彫刻史の上で興味ある作品群となっ



ている。

阿閼如来と伝えられる像は、両手で衣端を握る珍しい形姿を示すものである。この像が阿閼と呼ばれたのは、密教※の阿閼如来と左手が衣端をとる点が共通しているためかと思われるが、本像は、通常の阿閼如来と異なり立像であらわされ、また像容も一致していず、その当初の尊名は不明である。

像の本体は、丸吹きで足柄あしはらまで一鑄として、表面には鍍金の跡が残っている。頭に螺髪らぼうがなく、童顔で頭部が大きく、衣は肉身に密着するようにあらわされている。

このような特色は、奈良時代も早いころの像に良くみられ、本像はこのころ制作されたという説が一般的であるが、その一方、童顔の顔の表情に暗さがあり、全体に表現が固くなっている事から前代の小金銅仏の作風を受けて、奈良時代末ごろから平安時代の初めころに制作されたという説も有力である。

三

板彫 両界曼茶羅

二面

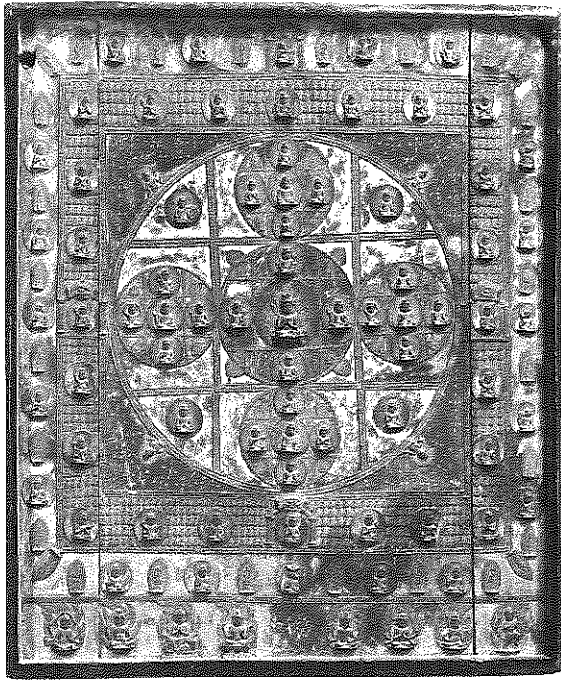
所有者 白川川上り谷

地蔵院

法量 各 縦四四・九センチ

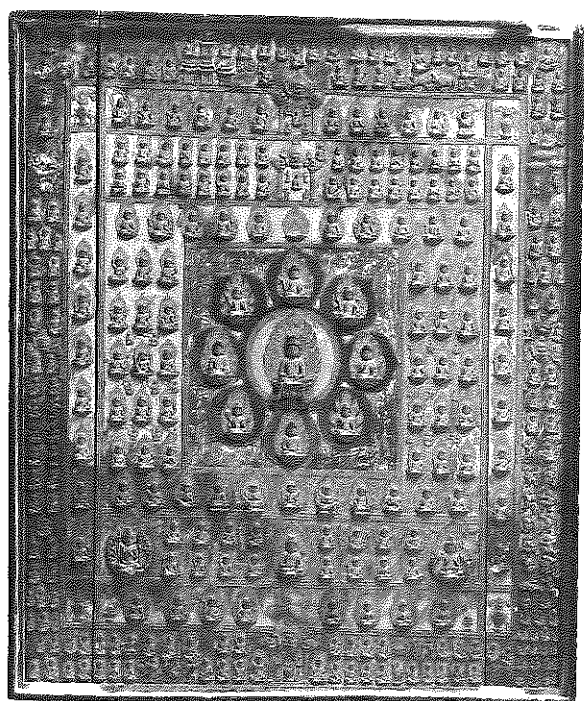
時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



板彫金剛界曼茶羅

地蔵院は中世末に開創された浄土宗の寺である。その前身である金色院は、藤原頼通の娘で後冷泉天皇の皇后であった寛子が康和四年（一一〇二）創建した寺と伝えられ、一時大いに栄えた。地蔵院には、この金色院伝来の遺品が多数伝わっているが、この板彫両界曼茶羅もその一つである。両界曼茶羅は、密教の根本理念を大日如来を中心とした諸尊の配列によってあらわしたもので、胎蔵界と金剛界の二つからなり、通常絵画であらわされる。地蔵院のものは、白檀びやくだんと思われる檀木を左右三枚矧ぎつけたもので、そこに両界曼茶羅をいねいに彫り出したものである。図様で特に注目されるのは金剛界の方で、通常九会くゑからなるものを、その中心となる成身会じょうじんゑだけであらわしている。これは八十一尊曼茶羅の形式で、台密たいみつ（天台密教）で良く用いられたものである。両面とも地には彩色や切金文様きりきんぶんぎょうを施すが、諸尊の多くは素地すぢでわずかに髪や唇に墨や朱を点じている。その制作は康和四年の金色院創建のころと思われるが、いずれにしても他に遺例の極めて少ない貴重なものである。



板彫胎藏界曼荼羅

三 銅造阿弥陀如来及脇侍像（一座） 二軀

所有者 白川川上り谷 地藏院

法量 像高 中尊 一九・三センチ

脇侍 二四・二センチ

時代 奈良〜平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



寺伝では、右脇侍が欠失しているが、阿弥陀三尊像と伝えられる小金銅仏である。蓮池に見たてた円形台座（かまぼこ座）から生えた一根三茎の蓮華座に、中尊像と脇侍像がのる姿であらわされている。別にのびる三本の茎は、現在には失われている光背を支えていたと思われる。

中尊、脇侍像とも蓮華座の蓮肉まで本体と一鑄とし、表面には鍍金の痕跡がよく残っている。中尊が左手を膝に伏せた印を示しているのは阿弥陀としては異例で、この像も当初の尊名をあきらかにしがたい。体の均衡がとれ、肉付けも比較的自然で、形制も古様であり、奈良時代も古いころのものに属するものかとも思われるが、顔の表情の暗さや台座の重厚の^{*}つくりなどから、本像の制作を奈良時代末ごろから平安時代の初めごろまで下がる説もある。なお、地藏院に伝わる金銅仏のうち、本像だけが現在京都国立博物館に預けられている。

二 銅造釈迦如来坐像

一 軀

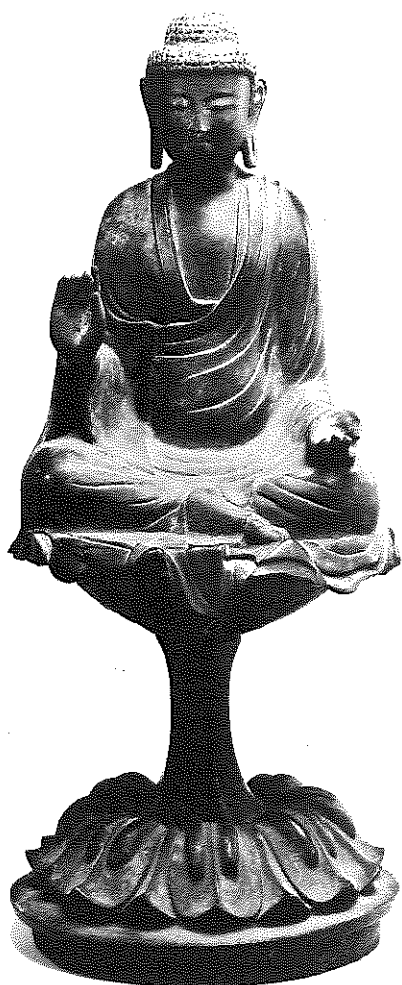
所有者 白川川上り谷

地藏院

法量 像高 二六・四センチ

時代 奈良く平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



本像は、寺伝では釈迦如来と呼ばれている如来像である。本体は台座の蓮肉部とその下の丸柄まで一鑄とし、

これを受ける六角形支柱以下の台座下部が別に一鑄されている。像の表面には、鍍金の跡がわずかに残っている。本像の形の上で変っている点は、組んだ足先を膝から外したいわゆる安坐という坐り方をしている点で、これは特に如来のものとしては他に例を見ないものである。

本像の制作年代も諸説あるが、童顔の顔に形ばかりの目鼻立を配し、体は細っそりとして厚味もなく、衣文も形式化しており、全体に硬化、形式化の著しい像であることなどから、奈良時代末ごろから平安時代初めごろに前代の金銅仏をもとに制作されたものとする説が有力である。

三五 銅造大威徳明王像^{だいいてくみょうせう}

一 軀

所有者 白川川上り谷

地藏院

法量 像高 一七・〇センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



地藏院には、前記の古様な小金銅仏のほかに、金色院
伝来と思われる大威徳明王像が伝えられている。大威徳

明王は、不動明王を中心とする五大明王の一つで、自分

に敵意を持つものや害をくわえようとするものを降伏さ
せる法要の本尊に用いられる密教像である。その形は、

三つの目をそれぞれもつ六つの顔（六面）と六つの腕（六
臂）を持ち、足は六足で牛のうえにのる特異なものである。

像の本体は、頂上の三面や腕、足の一部を別鑄とする
ほか、体頭部を極めて薄手に鑄上げ、鍍金を施している。

牛とその下の台座もやはり薄手に鑄上げていて、火焰光^{かえんこう}
背は銅板を切抜いてつくり上げている。怒りをあらわし

た忿怒像でありながら顔の表情には誇張が避けられ、肉
取りや衣文の表現も穏やかである。こうした趣

きは、平安後期の木彫像に通じるものであり、
数少ないこの時代の金銅仏の中央作として大い

に注目される遺品である。

二六 木造観世音菩薩坐像

一 軀

所有者 白川川上り谷

地藏院

法量 像高 七八・八センチ

時代 平安時代

指定 彫刻 明治四十二年四月五日



本像は、往生者をのせて西方（阿弥陀）浄土にはこぶための蓮台を両手で捧げ、左膝を立膝として坐す観音像

である。こうした形姿の像は、阿弥陀三尊の脇仏に多く、本像もその可能性が強い。

檜材を用いた寄木造りの像で、表面を漆箔仕上げとしている。顔は伏目がちの穏やかな表情をしており、体の均り合いもとれ、衣文は浅く流れるようにあらわされている。こうした優美で全体の調和のとれた姿は、平安後期の仏像彫刻の作風を典型的にあらわしたもので、本像の制作はおそらく金色院の創建された康和四年（一一〇二）のころになされたものであろう。なお、本像は現在京都国立博物館に預けられている。

二七 木造阿弥陀如来立像

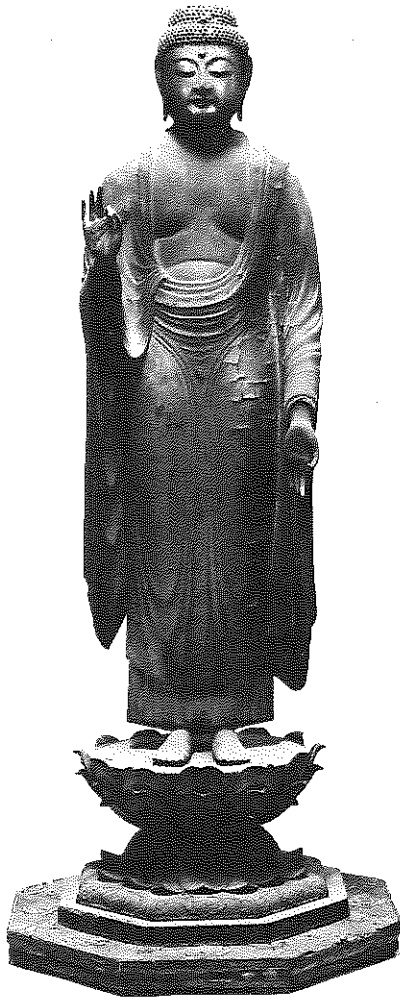
一 軀

所有者 白川川上り谷 地蔵院

法 量 像高 八一・八センチ

時 代 平安時代

指 定 彫刻 明治四十五年二月八日



本像は、来迎印を結んで蓮華座上に立つ阿弥陀如来である。来迎印は、両手の親指と人差指を捻じるもので、

この印を結ぶ阿弥陀像は、平安後期の浄土教の隆盛ともに盛んにつくられるようになってきて、特に鎌倉時代以降はほとんどこの形でつくられるようになった。

本像は、やはり康和四年（一一〇二）に創建された金色院伝来のものと思われ、穏やかな顔の表情や奥行が浅く均り合いのとれた体部、数が少なく浅く流れるような衣文の表現といった像の作風の特徴は、本像が金色院創建のころ制作されたことを物語っている。また、檜材を用いた寄木造りの像の構造や表面を漆箔で仕上げるのも、このころの如来像に通常見られるとおりである。なお、

※台座も当初の部分が残っていて、一部に宝相華文が華やかに浮き彫りされている。この像も現在京都国立博物館に預けられている。

二六 金銅鳳凰 ほうおう

(鳳凰堂中堂旧棟飾)

一対

所有者 宇治蓮華

平等院

法量 北方像 総高 一三五・〇センチ

南方像 総高 二二八・八センチ

時代 平安時代(天喜元年・一〇五三)

指定 工芸品 昭和四十七年五月三十日

国宝 昭和四十八年六月六日



もと鳳凰堂中堂の大棟両端に向い合うように据えられていたもので、現在は宝物館に別途保管されているものである。鳳凰は、古来中国で尊ばれた想像上の瑞鳥で、聖徳の天子の兆として現われると伝えられるものである。像は、鑄銅製で、頭部、胴部、尾部の三部に別鑄してつなぎ、これに銅板製の翼や尾の羽根を鋳留めしている。全身は鍍金とぎで仕上げられている。眼を大きく開き、鋭いくちばし嘴を持ち、胸を張り、翼尾を大きく広げて立つ像で、全体に落ちついた均衡のとれた姿にあらわされているが、肉どりはひきしまり嘴は鋭いなど力強さも見られる。

平安時代を代表する金工品の優品であるが、この鳳凰のすぐれた出来ばえと定朝がこれと似たものをつくったことが知られていることなどから、天喜元年の鳳凰堂完成時に定朝が製作にかかわったものと思われる。

なお、鳳凰堂の名は、堂全体の形が、鳳凰の羽根を広げた形に似ることから名づけられたとする説が有力であるが、大棟に据えられたこの鳳凰にちなんだものという説もある。

二九 梵鐘ぼんしやう

一口

所有者 宇治蓮華 平等院

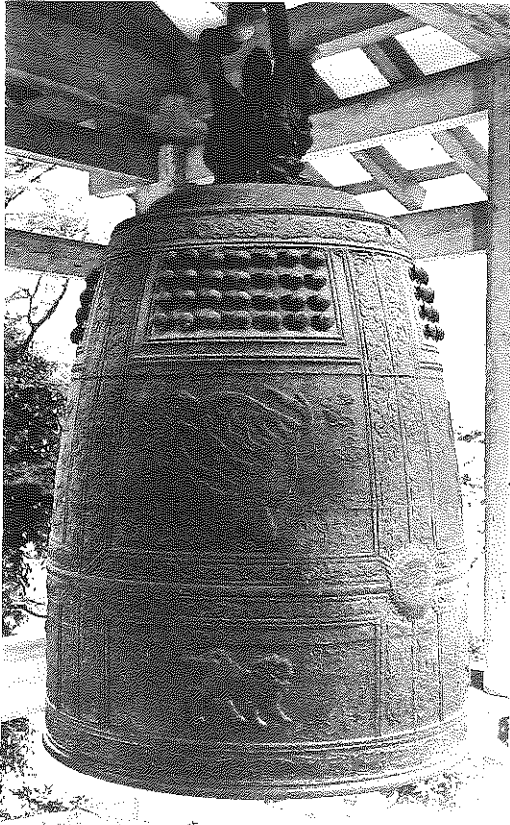
法量 総高 一九九・〇センチ

口径 一二三・〇センチ

時代 平安時代

指定 工芸品 大正三年四月十七日

国宝 昭和二十七年三月二十九日



俗に天下の三鐘に数えられ、形の美しいことで知られる銅鐘である。鐘身は、竜や霊鳥などを交えた唐草文を配した縦横の帯や紐ちゆうにより、上下三段、左右四区に区分される。最上段（乳の間ちゆう）には、頭部が半球状、頸部が喇叭状らふをした大形の乳を各区に四段七列に配している。中段（池の間いけ）には各区に雲中を舞う天人を一体づつ、また最下段（草の間くさ）には各区にやはり一体づつ獅子を浮彫であらわしている。撞座つみざは八葉複弁の豊麗なもので、その位置は鐘の最上部につく竜頭りゆうとうの長軸線上にあって、前代のもとは異なっているが、やや高い位置に据えられている。上帯の上の笠形かさがたはやや高目で、この上につく竜頭はたてがみをそばだて口を大きく開いて笠形をかんでいる。

本鐘は、落着きのある形の整った梵鐘であるが、その第一の特色は、所々に鑄表された華麗な裝飾文様であり、他には例を見ないほどのものである。無銘で、また制作に関する資料を欠くものであるが、やはり平等院草創期の遺品と思われ、数少ないこの時代の梵鐘を代表する作例として甚だ貴重なものである。

三〇 梵鐘

承元四年庚午十一月廿日の鑄出銘がある

一口

称名寺は、現在浄土真宗仏光寺派の寺であるが、その伝来は不明で、今の寺は江戸時代に光円が再興したものであるという。

所有者 東笠取谷ノ奥 称名寺
法量 総高 一一七・一センチ
口径 六四・五センチ

この梵鐘は現在当寺の鐘楼につらわれているが、元は銘文にあるとおり和泉国（大阪府）の一宮（大鳥）神社の鐘として制作されたもので、後に京都市山科の勧修寺に移り、さらに当寺に伝来したものである。

時代 鎌倉時代（承元四年・一二二〇）

指定 工芸品 昭和五十一年六月五日

鑄銅製で、八葉複弁の撞座の形式や竜頭の小形の宝珠などに鎌倉時代前期の特色がよくあらわれていて、あまり遺品の数にめぐまれないこの時代の梵鐘の基準作として注目されるものである。

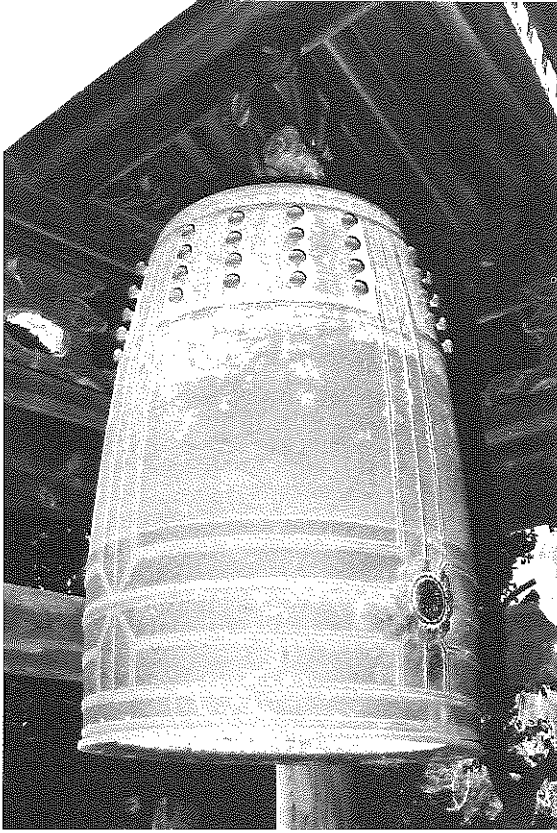
なお、池の間一区には、左記の銘文を鑄出するが、「大明神」の三字のみが厚く鑄出されていて、他は薄い。

（銘文）

和泉国

一宮天光大明神 御宝前

承元二二年庚午十一月廿日



三 宇治橋断碑

一基

所有者 宇治東内 放生院

法量 当初部 高四八・五センチ

時代 飛鳥時代（大化二年・六四六）

指定書跡 昭和四十年五月二十九日

大化二年（六四六）に山城国出身の元興寺の僧道登が宇治橋を架設したときの由来を伝えている碑文で、寛政三年（一七九一）に放生院の境内より発見された時に、尾張国の小林亮適らによって現在の形に復原されたものである。

当初の部分は碑の上方三分の一ほどで、二十七字を存している。体裁からみて碑文は野線中に三十二字を一行として三行、四句を一節にしている。なお、当初部以外は、復原時に『帝王編年記』によって補われている。また、碑背には発見の事情や復原建碑の由来が刻されている。

書風には中国六朝時代の影響が見られ、上代書道史

上注目されるものであるが、現存最古の碑文として極めて名高いものである。

碑文

洸流横流、其疾如箭、修（修征人、停騎成市、欲赴重深、人馬亡命、從古至今、莫知杭竿）

世有釋子、名曰道登、出（自山尻、惠滿之家、大化二年、丙午之歲、構立此橋、濟度人畜）

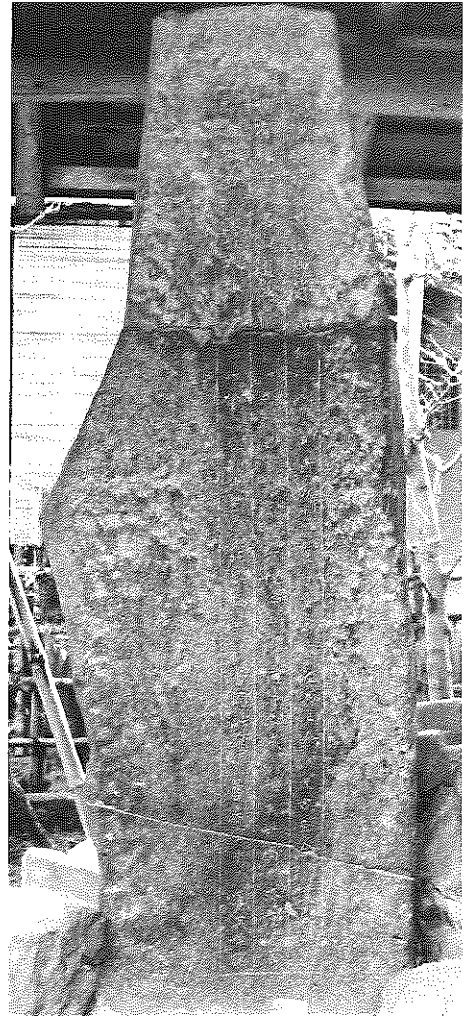
即因微善、爰發大願、結（因此橋、成果彼岸、法界衆生、普同此願、夢裏空中、導其苦緣）

（ ）内は補った部分

洸々たる横流、其の疾こと箭の如し、修々たる征人、騎をとめて市をなす。重深に赴かんとすれば、人馬命をうしなうことを、古より今に至るまで、杭竿を知るなし。

世に釈子あり、名を道登という、山尻の惠滿の家より出ず。大化二年、丙午之歳、此の橋を構立し、人畜を濟度す。

すなわち微善に因り、ここに大願をおこし、因を此の橋に結び、果を彼岸になさん。法界衆生、あまねく此の願に同くし、夢裏空中、其の苦縁を導かんことを。



三 黄檗山木額、柱聯、榜牌、同下書

額

四〇面

聯

四四対

榜牌

一三面

下書

一四幅

所有者 五ヶ庄三番割

萬福寺

時代 江戸時代

指定 書跡 昭和三十四年十二月十八日

萬福寺の諸堂の入口や堂内にかかる木額類とその下書を一括したものである。柱聯は柱にかけられた一対の細

長い額であり、榜牌は僧の集団生活を規制する指示事項などを書した堂内にかける額である。

木額類は、檜、桜、チーク材などを用いて彫刻し、金や極彩色で装飾した中国風のものである。

これらは下書を含め、いずれも開山隠元、二代木庵、三代慧林などの萬福寺の歴代や、黄檗僧の手になるものであるが、特に隠元、木庵の遺品が多い。

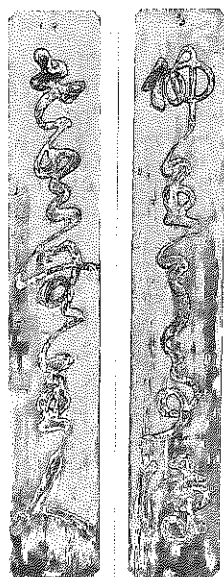
その書風は誠に雄大なもので、江戸時代に唐様として尊重され、文人墨客に多大な影響を与えた黄檗流の書の代表的遺品といえる。なお、榜牌に記された規則などは、江戸時代の宗教界に特異な位置を占めた黄檗派の法規や行事を知る格好の資料でもある。



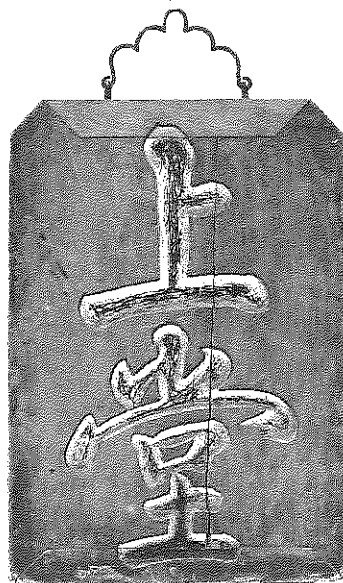
額（大雄宝殿）



榜（禪堂內）



聯
佛是了事漢·世豈無全人



牌

三
鉄眼版一切経版木

四八、二七五枚

附 大藏経請去総牒 一冊

宝蔵院縁起 一冊

所有者 五ヶ庄三番割 宝蔵院

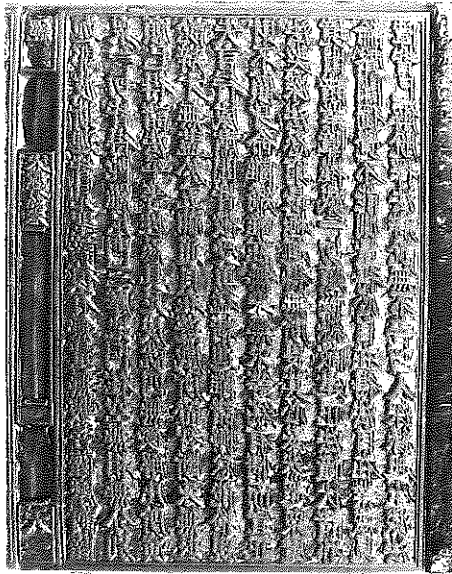
法量 縦 一七・九〜二四・二センチ

横 七・九センチ

厚 一・八センチ

時代 江戸時代

指定 歴史資料 昭和三十二年二月十九日

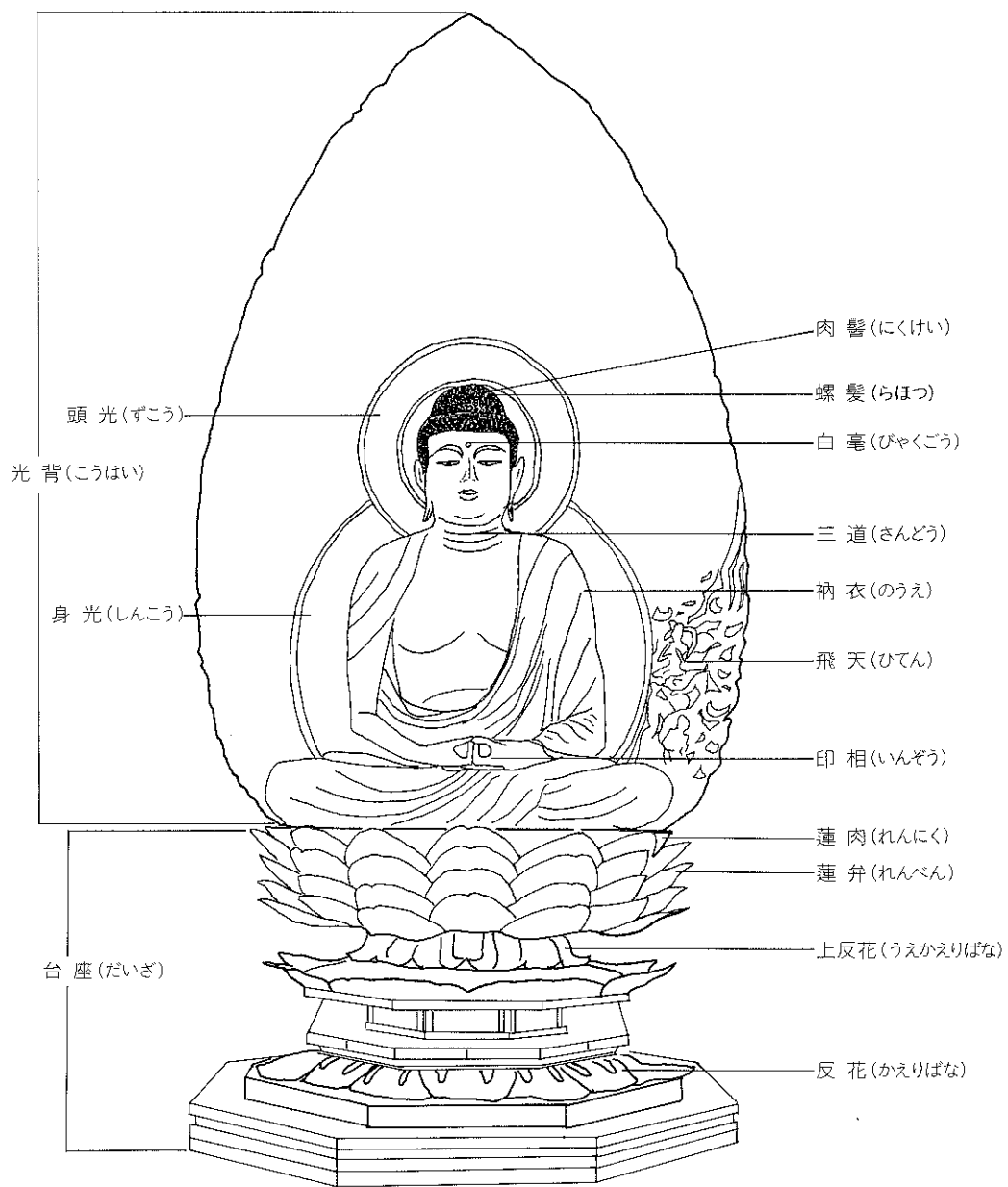


鉄眼道光（二六三〇〜八二）は、肥後（熊本）の人で、
隠元、木庵に師事した江戸時代前期の黄檗僧である。彼
は、一切経（仏教典の総称で大藏経ともいう）の版木の開
版という大事業を発願し、隠元より明の万曆版一切経と
版木を貯える土地を得て、寛永八年（二六六八）から延
宝六年（一六七八）にかけて開版した。

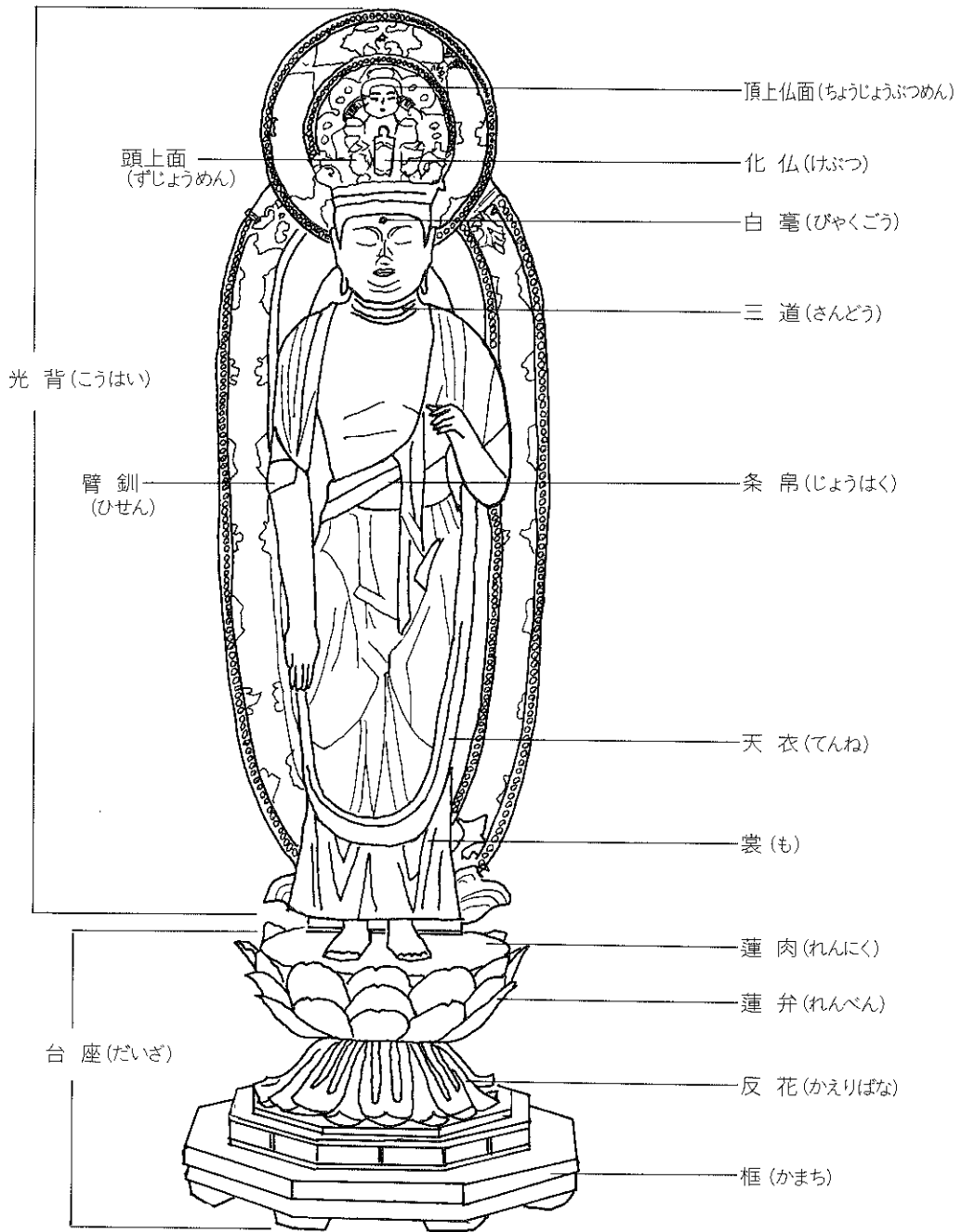
版木の材は桜が用いられ、一枚に見開き二ページ分が
二つづつ彫り出されていて、文字は楷書で陽刻されてい
る。

この膨大な数の版木は、鉄眼の名をとり鉄眼版、ある
いは黄檗版と呼ばれ、近世印刷史上極めて名高いもので
あるが、昭和三十七年にこれら貴重な版木を納める収蔵
庫が完成し、現在ここに保管されている。

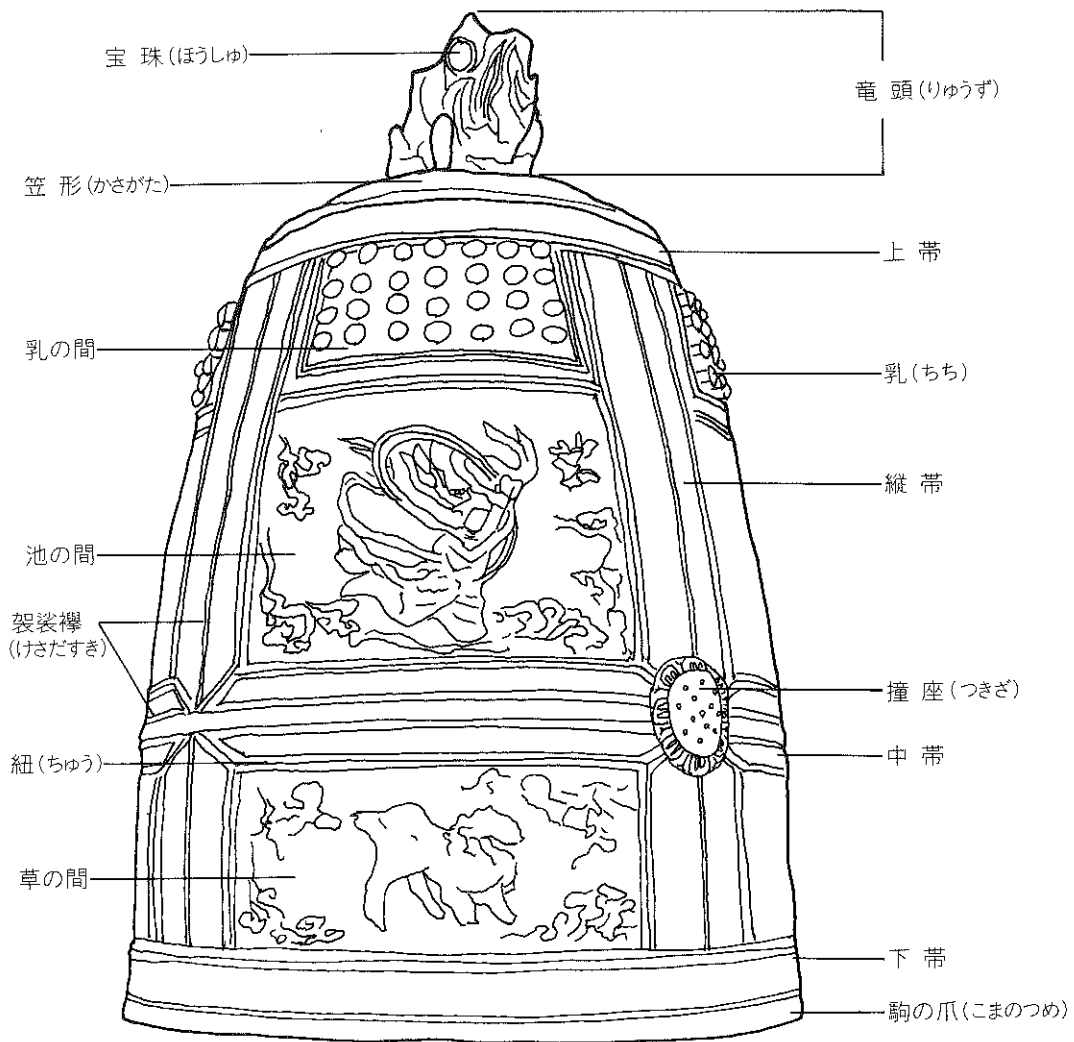
なお、附指定の二冊は、この一切経の普及状況や鉄眼
と関係の深い宝蔵院の縁起を知ることのできるもので、
関連資料として重要なものである。



如来各部名称 (阿弥陀如来・平等院)



菩薩各部名称 (十一面観音・地藏院)



梵鐘各部名称 (梵鐘・平等院)

用語解説

いちぼくづくり（一木造） 像の頭部と体部を一木から彫り出す木造彫刻の技法の一つ。寄木造に対する用語。

いんそう（印相） 諸仏の示す手や指の組み方。

うちくり（内割り） 木彫像の内部を削って、空洞をつくる技法。

おりあげてんじょう（折上天井） 天井の内部をさらに一段高めたもの。

ぎよくがん（玉眼） 木彫像の眼に水晶をはめたもの。

鎌倉時代以後の仏像彫刻の大部分に用いられている。眼を彫刻しただけのものを彫眼という。

きりかね（切金） 金箔・銀箔を細く線状や三角・四角の小片に切り、仏像・仏画などにはりつけた装飾に用いる技法。唐から伝来した。

けぶつ（化仏） 菩薩の本地ほんじとなる如来。観音像は阿弥陀如来が化仏で、頭の正面に小さい像をつける。

こうはい（光背） 像の背後におかれ、仏体から発する光明をかたどったもの。頭部から発する光明を頭光ずこう、身

部から発する光明を身光しんこうといい、頭光と身光を組合せた二重円光が基本の形。形式や構造によって、舟形光・飛天光などがある。不動明王などは火焰をあらわした火焰光がある。

ごひゃくらかんぞう（五百羅漢像） 羅漢は悟りさとをひらき、世人の供養を受ける資格のある聖者。正しくは阿羅漢という。剃髪し粗衣をまとった僧形としてあらわされる。作画造像のときは、十六羅漢・十八羅漢・五百羅漢などの群像である。

さん（賛） 讃とも書き、画面の中に書かれた人の徳や物の美を称賛する詩・文のこと。禅宗僧侶の肖像画を頂相ていそうというが、頂相に像主が賛を付したものを自賛という。広義には画家自身が書くのを自賛という。

しっぽく（漆箔） 仏像彫刻の仕上げ法の一つ。像の表面に漆を塗り、その上へ金箔を置く技法のこと。

しゃくじょう（錫杖） 僧具。インドで僧侶が山野を遊行するとき、これを振り鳴らして毒虫などを追ったもの。

後世儀式化して、法具となる。

じょういん（定印） 阿弥陀如来坐像で、両手を膝の中央におき、第一指と第二指の指先をつけ、他の指をかさねる印をいう。

じょうちようよう（定朝様） 一一世紀に仏師定朝が完成した日本仏彫刻を代表する様式。実例を平等院鳳凰堂阿弥陀像にみることができる。

じょうろく（丈六） 一丈六尺（丈六） Ⅱ約四メートル八〇センチメートルほどの大きさを持つ像。ただし坐像では立像の半分の大きさになる。

だいざ（台座） 像を安置するための台。一般的なのは蓮華座であり、須弥座、裳懸座、瑟瑟座、岩座、荷葉座、雲座、禽獸座、生霊座などがある。

ち（乳） 梵鐘の乳の間に上下左右に整然とならぶ乳状突起。

つうけん（通肩） 両肩を衣でおおった姿。

つきざ（撞座） 鐘を打つ棒である撞木があたるところ。

古い時代のもものは撞座の位置が高く、時代が下ると撞座の位置も下ってくる。

のうえ（衲衣） 衲袈裟ともいい、そまつな衣のこと。

つけ方には、通肩と偏袒右肩の二種類がある。

ふんぬそう（忿怒相） いかりのかおかたちで密教の明王部諸尊に多い。

ふんだめ（粉留） 金粉をニカワを用いて像の表面に塗ったもの。

へんだんうげん（偏袒右肩） 右肩をあらわす大衣のまとい方。

ほうそうげもん（宝相華文） 想像上の美しい草花の文様で、唐時代に考案され、平安時代まで盛んに用いられた。

ほんじすいじゃく（本地垂迹） 仏は神の本来の姿（本地）、神は仏が仮に姿をかえてあらわれた姿（垂迹）とする、仏教を主体とする思想によって生まれた神仏習合の一種の信仰形態。

まんだら（曼荼羅） 仏教の理論的内容を図式で平面的、象徴的にあらわしたもので、梵語本来の意味は輪円、集団、あるいは区画された地域のことである。

みつきょう（密教） 仏教の二大区分の一つ。法身大日如来が自己内証の法門を説いた秘奥真実の教法。その教法は深密幽玄で、如来の神力加持をはなれては、うかが

い知ることができないことから、秘密教という。『大日教』

・『金剛頂経』をその根本聖典とする。わが国では、最澄・空海によって伝来され、天台系を台密、空海の法系を東密という。密教以外の教法を顕教といい、これと区別する。

みょうおう（明王） 大日如来の分身として、忿怒の相をあらわし、諸悪魔を降伏させ、仏法を守護する諸尊。

やまとえ（大和絵） 唐絵に対して、日本の画題を扱った、わが国特有の絵画の総称。藤原時代に起こった。

よせぎづくり（寄木造） 一木造に対する木造彫刻の技法で、多くの木を寄せ集めて像をつくる。

らいごう（来迎） 阿弥陀如来が多くの菩薩たちにとりかこまれて、往生する死者を、むかえとりにくることが多い。

また死者を迎えとって、極楽につれ帰ることを帰り来迎という。

らいごうへき（来迎壁） 仏堂内の仏壇のうしろにある二本の柱（来迎柱）の間の壁をいう。

らくかん（落款） 書画を完成したとき、作者が氏名雅号、年月、場所等を記したもの。印章をおすことが多い。

らほつ（螺髪） 卷毛をかたどった如来の頭髪。

りくちよう（六朝） 三世紀から六世紀まで、中国の楊

子江下流に建国し、南京を都とした呉・東晋・宋・齊・梁・陳の総称。

りゅうず（龍頭） 鐘を吊り下げるところ。笠形の上部分中央につき、普通、ふたつの龍の頭と宝珠で構成されている。

りょうかいまんだら（兩界曼荼羅） 密教の根本的教典である金剛頂経および大日経にもとづいてその仏教的世界観を図にあらわしたものの。

れんげざ（蓮華座） 最も一般的な台座の形式。仰蓮と反花からなる簡素なものから八重、九重座とより複雑な形式のものがある。

わよう（和様） 大陸の様式に対して日本の様式をさす。彫刻の定朝様、絵画の大和絵、書跡の道風様。

国指定美術工芸品一覽

(区分)	(製作年代)	(種類)	(文化財の名称)	(員数)	(所有者)
国宝	平安(天喜元)	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	一軀	平等院
国宝	平安(天喜元)	彫刻	木造天蓋	一具	平等院
国宝	平安(天喜元)	彫刻	木造雲中供養菩薩像	五一軀	平等院
国宝	平安(天喜元)	絵画	鳳凰堂中堂壁扉画	一六面	平等院
国宝	平安	工芸品	梵鐘	一口	平等院
国宝	平安(天喜元)	工芸品	金銅鳳凰	一對	平等院
重文	平安	彫刻	木造十一面観音立像	一軀	平等院
重文	平安	絵画	本殿扉絵	四面	宇治上神社
重文	平安	彫刻	木造菟道稚郎子命坐像	一軀	宇治神社
重文	鎌倉	彫刻	木造地藏菩薩立像	一軀	放生院
重文	平安	彫刻	木造不動明王立像	一軀	放生院
重文	飛鳥(大化二)	書跡	宇治橋断碑	一基	放生院
重文	平安	彫刻	木造伊那那美尊坐像	一軀	白山神社
重文	平安	彫刻	木造十一面観音立像	一軀	白山神社
重文	平安	彫刻	板彫両界曼荼羅	二面	地藏院
重文	奈良、平安	彫刻	銅造阿閼如来立像	一軀	地藏院
重文	奈良、平安	彫刻	銅造阿弥陀如来及脇侍像	二軀	地藏院

重文	奈良、平安	彫刻	銅造釈迦如来坐像	一軀	地藏院
重文	平安	彫刻	銅造大威徳明王像	一軀	地藏院
重文	平安	彫刻	木造観世音菩薩坐像	一軀	地藏院
重文	平安	彫刻	木造阿弥陀如来立像	一軀	地藏院
重文	平安	彫刻	木造阿弥陀如来及両脇侍坐像	三軀	三室戸寺
重文	平安	彫刻	木造釈迦如来立像	一軀	三室戸寺
重文	平安	彫刻	木造毘沙門天立像	一軀	三室戸寺
重文	江戸(寛文十一)	絵画	紙本著色隠元和尚像	一幅	萬福寺
重文	江戸(明・崇禎九)	絵画	紙本淡彩観音図	一帖	萬福寺
重文	江戸	絵画	紙本淡彩西湖図等	六点	萬福寺
重文	江戸	書跡	黄檗山木額・柱聯・榜牌・同下書		萬福寺
重文	江戸	歴史資料	鉄眼版一切経版木	四八、二七五枚	宝蔵院
重文	平安	彫刻	木造薬師如来坐像	一軀	西導寺
重文	平安	彫刻	木造毘沙門天立像	一軀	西導寺
重文	平安	彫刻	木造地藏菩薩坐像	一軀	能化院
重文	鎌倉(承元四)	工芸品	梵鐘	一口	称名寺

写真提供先一覧

京都国立博物館

鳳凰堂中堂壁扉画

本殿扉絵

紙本著色隠元和尚像

紙本淡彩五百羅漢図

紙本淡彩波濤図

木造雲中供養菩薩像

木造十一面観音立像

銅造阿闍如来立像

板彫両界曼荼羅

銅造阿弥陀如来及脇侍像

銅造釈迦如来坐像

銅造大威徳明王像

木造観世音菩薩坐像

木造阿弥陀如来立像

金銅鳳凰

(掲載頁)

9

11

12

15

14

18

20

33

34・35

36

37

38

39

40

41

奈良国立博物館

木造阿弥陀如来及両脇侍坐像

木造釈迦如来立像

萬福寺

紙本淡彩観音図

紙本淡彩西湖図等

紙本淡彩虎溪三笑図

黄檗山木額、柱聯、榜牌

宇治市歴史資料館

木造阿弥陀如来坐像

木造天蓋

木造十一面観音立像

梵鐘

(掲載頁)

24・25

27

13

15

15

15

46

17

19

20

20

42

上記以外の写真の撮影および図の作成、用語解説、編集は宇治市教育委員会社会教育課が行った。

宇治の美術工芸

昭和六十年三月三十一日発行

編集
発行 宇治市教育委員会

印刷 河北印刷株式会社

